

「学びの主体は生徒にあり」を念頭に本校の先生方はその具体策に取り組んでいます。なかなか思うように進んでいないのが現状です。その現状を打破するために、本校教員はさまざまな研修を通じて学んでいます。

11月16日(水)、(株)アクティブ・ラーニング協会の中島博司先生をお招きして「学力向上につながるアクティブ・ラーニング」についての研修を行いました。目から鱗の内容に肚落ちし、学んだ様々な手法はすでに授業実践に役立っている先生も多くいます。

また、11月25日(金)には「公開研究授業」が行われました。たくさんの他校の先生方から貴重な助言をいただき、生徒主体の学習のあり方について学ぶことができました。(右写真は11月16日の研修の様子)



学び続ける、協創の先生

11月16日(水)、アクティブ・ラーニング(以下、AL)についての研修会が行われました。会の冒頭、講師の中島先生は「このような研修会で大切なことは、いかに“自分事化”できるか、また、“置換力”を発揮できるかです」と話されました。これはとても重要なことです。先生方は用語としてのALは知っているし、勿論実践している先生も多くいます。が、その状況において改めてALを捉え直し、研修後、「なぜALなのか」と問いながら実践に移し、応用・転用できるようにしてください、という先生のメッセージなのです。

ALの目的は、アクティブラーナー(能動的学習者)を育成することに他ならないと明言されました。なぜなら、「授業の主体は生徒」だからです。教師の一方的で画一的な授業では真の学力が身につかないのです。これは、以前紹介した「ラーニング・ピラミッド」でも示されています。いかに生徒自身が積極的に学ぼうとするかが大切であることは間違いありません。

そのための手法の一つとして、「R80」(アールエイティー)を紹介していただきました。これはALに取り組んだ最後にリフレクション(振り返り)とリストラクチャー(再構築)をするもので、生徒各自が80字以内で文章を書きます。必ず2文で構成し、2文を接続詞で結ぶという約束があります。論理力が高められ、記述式問題の対応にもつながるということでした。また、「TO(ティーオー)学習」という手法についても紹介していただきました。Teaching Others(他の人に教える)ということですが、学年を超えた「縦割りのペアワークやグループワーク」が有効なやり方だろうということを示唆していただきました。

さらに、こうした学びに欠かせないのは、教師と生徒間あるいは生徒間の「リスペクト」(敬意を払う、尊敬する)という心情が欠かせないことを説いておられました。そして、研修の最後には、「研修を重ねて、こう

して学んだことを取り入れようと思うだけではだめで、一步踏み出す勇気を持ってやってみることが肝心」と言われ、その踏み出す勇気を中島先生から授かった、この度の研修でした。

11月25日(金)には「公開研究授業」が行われました。他校の先生方、広島県立大学と広島修道大学学生のみなさん、合わせて60名近い方々に来校していただきました。

研究テーマは「ルーブリックを活用したパフォーマンス評価に基づく授業実践」。5教科(国・数・理・社・英)に加え、「探究」の授業を参観していただき、分科会で授業がどのように構築されたかについて評価及び検討していただきました。そして、全体会では広島県立大学教授・門戸千幸先生から、このたびの研究授業の趣旨確認と今後本校が目指すものについてご助言いただきました。

ルーブリックを用いた評価は、アクティブ・ラーニングの評価方法として最適なものと言われています。それは、生徒が「何を知っているか」ではなく、「何ができるようになったか」を評価することになるからです。また、生徒が「いま何を学んでいるのか」「何を目指して学んでいるのか」といった“メタ認知能力”を身につけることにつながっていきます。

いま現在、アクティブラーナーを育てることは最早必至の命題です。生徒の未来を見通し、生徒主体の授業スタイルの転換と構築は待ったなしです。この“公開研”は教師のスキルアップではありますが、目的は生徒の成長(能動的な学習者となり、自走をする人)を促していくことにあるのです。

誰のためではない、生徒のために協創の先生方は学び続けます。それは、生徒の成長した姿に出会うことが協創の先生方の何よりの喜びだからです。